

アウグスチヌス「神国論」の現代的意義

高 橋 亘

アウグスチヌスの神国論は千五百年も前に書かれたものですから、ある人々は、それは現代には何も教える所のない書物であると言います。併し「真理は常に新しい」と言われますように、私は神国論の中には、深い真理性——しかも現代人の忘却している種類の真理性——が説かれていると思います。その点に就いて若干お話したいと思います。

アウグスチヌスの神国論は歴史哲学思想の系譜において、大規模な体系としては一番最初に来るものであります。併し多くの歴史哲学の著書、殊に近代の歴史哲学著書と比較しますと大きな相違があります。例えば、近代の歴史哲学著書の代表としてヘーゲルを例にとりて比較して見ますと、次の相違に気づきます。アウグスチヌスが歴史哲学思想として纏めて説いていますのは第十一巻から第二十二巻迄ですが、其処では歴史は三つの部分に分たれて叙述されております。即ち我々が普通の意味で「歴史」と呼んでいるものを中間に挿んで、その前の「前史」とも言うべきもの、また普通の歴史の後に来るもの即ち「後史」とでも言うべきものが説かれています。即ち歴史は「前史」と「今日我々が普通言う意味での歴史」と「後史」と言う三つの部分に別れています。「前史」と言うのは、世界の創造、人間の創造、人間の墮罪等に就いてであります。「後史」と言うのは我々の死後の世界に就いてであり、所謂「終末論」であります。我々の普通言う歴史は此の様な「前史」と「後史」との中間にあるものとして見られております。即ちヘーゲルと比較しますと、ヘーゲルの歴史として取扱っている部分は、アウグスチヌスの取扱っている部分の三分の一であります。

さて「前史」と「後史」とは相対応するものでありますから、今話す為

の便宜上これを纏めて一言で「終末論」と呼んで話を進めて行きます。ヘーゲルの歴史哲学には終末論がありません。これがヘーゲルの歴史哲学とアウグスチヌスの歴史思想の大きな相違であります。

「終末論」と言いますと、今日の多くの人にとっては縁遠いものかも知れません。併し終末論と言う背景なしに、本当に歴史と言うものを考えることが出来ますでしょうか。例えばヘーゲルの歴史哲学を例にとって見ますと、彼の歴史哲学には奇妙なことが起っております。即ちヘーゲルの歴史哲学には未来に就いての言葉は一言もありません。ヘーゲルは偉大な哲学者であると共に優れた歴史家であり、過去の事柄に就いては深い洞察を示しております。例えばシナや印度の本質に就いても、少しの材料の中から、その本質を把捉していると言われております。併し未来に就いては一言も述べておりません。彼が未来に就いて関心がなかったのかと言うとそうではありません。彼はやがて来るべき重要な学問である経済学や、やがて来るべき重要な国家であるアメリカ等に就いても一生懸命研究しております。併しこれらに就いては、彼は「歴史哲学」において一言も述べておりません。元来、歴史哲学の一番中心の締めくくりになるものは、「歴史の意味は何であるか」、「歴史の目的は何か」、「歴史の進展して行くその目標は何か」と言うことであります。これに就いてはヘーゲルは「歴史の目的は自由の意識における進歩である」⁽¹⁾と言う有名な言葉を述べております。ここで言われている「自由」と言う言葉は二通りの意味に解釈されることが出来ます。第一の意味は、「東洋においては一人だけが自由であった。ギリシヤ・ローマにおいては若干の人だけが自由であった。ゲルマン世界においてはすべての人が自由である」⁽²⁾と言う言葉で表現されている様な政治的自由を意味します。併し此の様な政治的自由は、人間の本来的の目的を達成する為の手段ではありますが、それ自体が目的ではあり得ません。ヘーゲルが言っている「自由」の第二の意味は、真理を体得したものが自由である。「真理は汝等を自由にせん」と言う意味の「自由」であり⁽³⁾ます。併しヘーゲルの場合、此処で真理を体得して自由になる主体は「精

神」(Geist)即ち絶対精神、歴史の領域で言えば「世界理性」であります。絶対精神が個人の精神、更に民族精神を媒介としながら、それらの相互影響、相互闘争を通して己れを実現して行く経過を世界歴史と見るのであります。これは歴史を上から、全体的に眺めて言ったもので、間違いではないでしょうが、併し身体を持ち、生き、苦しみ、闘っている現実的人間に対する解答としては不十分であります。その結果、現実的歴史の目標としては、ヘーゲルの「歴史哲学」や「法哲学」の文面だけから見ますと、ヘーゲルの住んでいたプロシヤ国家が歴史の目標であるかの様な印象も受けます。勿論大哲学者ヘーゲルがそんなことを考えたとは思われませんが、文面だけから見ると、そう解釈出来ます。此の様な奇妙なことが起きて来るのは、ヘーゲルが所謂「終末論的側面」を考慮せずに歴史哲学を考えようとしたからだと思えます。人間の生は背後に死を含んでいますので、人間の生を考える時は、此の生と死を二つの要素として持つ「高次の生」を考えねばならぬように、人間の歴史を考える時も「終末論」を含めての高次の歴史を考えねばならぬと思えます。アウグスチヌスの神国論は歴史哲学でなくて歴史神学であると批評される場合もありますが、私は歴史哲学が真の歴史哲学であり得る為には歴史神学にならねばならぬと考えます。

さて、現実を終末論的に見ると言うことは、現実を永遠の立場から見ると言うことですが、併しこれは現実をただ否定的に見ると言うことではありません。御存知の様に神国論の成立の動機は、蛮族のアラリックがローマに侵入してローマを荒し、ローマは酷い目にあった。それを契機として保守主義者達が、ローマが此の様な悲惨な目に会うのは、キリスト教の様な新しい宗教をローマの国教としたからである、と非難した。そう言う非難に対する護教論として筆を執ったのでありますから、現実を永遠の立場から見ると同時に、又、現実を現実として見ると言うこともなければならぬ訳であります。従って神国論においては、現実をただ現実として見る「現実肯定」の立場と、現実を永遠から見る「現実否定」乃至は「現実超越」の立場と、此の二つの立場が混在しているのであります。もう少し具

体的に申しますと、アウグスチヌスは一方では、「人間の真の国籍は天国にある」、即ち人間は此の世における旅人である、homo viator である、⁽⁴⁾と言っています。併し他方では「現実世界も亦それ自身の善きものを持つ」と言っています。併し勿論此の二つの立場が同等の重さを持つものではなく、現実超越の永遠的立場が第一のものであり、現実肯定の立場は第二のものであることは言う迄もありません。現実を肯定すると言いましても、その肯定はあく迄もある限界内での肯定、相対的肯定であります。但し此の三つの立場がまざり合っているとすることは神国論を読む場合注意しなければなりません。神国論において、お互に矛盾したことが説かれている様に思われる個所がありますが、これは此の様な立場の二重性から来ると思います。一例を挙げればアウグスチヌスの国家論です。一方では⁽⁵⁾国家を否定する様な有名な「国家盗賊団説」を唱えます。小さなグループでやれば盗賊団だが、大きな組織だった大グループでやればそれは国家の事業と呼ばれる、と言うのです。併しアウグスチヌスはトルストイのような、国家を全面的に否定する無政府主義者かと言えばそうではありません。他の個所では、人間が平穩に生き得る為の秩序を保つ為の組織として国家の必要を認めています。又実際問題として、テオドシウス帝以来ローマ国家はキリスト教を国教としていますし、又アウグスチヌスは反対派のドナティストを鎮圧する為に国家の協力を求めております。又他の例としては「正義」の徳を挙げる事が出来ます。盗賊団でもそれが団体として成立し得る為には、その構成員が「正義」の徳によって結ばれていなければなりません。併し盗賊団の各員の間を支配している「正義」は相対的正義です、本当の意味の絶対的正義ではありません。アウグスチヌスによれば、真の徳は信仰に基づかねばなりません。信仰に基づかない徳は「輝ける⁽⁶⁾悪徳」に過ぎません。

さて、此の様な二重の見方をアウグスチヌスは歴史一般、更にはローマ史に対しても適用します。神国論第一巻から第三巻迄、アウグスチヌスはローマの暗黒面に就いて説きます。ローマは共和政の末期以来、精神的に

低下墮落して、精神的に決して幸福でなかった。又物質的・物理的には種々の天災即ち地震、洪水、火山や種々の人災即ち内乱、戦争等が連続して決して幸福でなかった、と説きます。併し他面、ローマが当時の世界を支配して、それ迄なかった様な大帝国をつくったことも事実です。併し現実的に偉大な事業をなし遂げる為には、それだけの現実的な徳を持たねば不可能であります。ローマをして大ならしめたその原因は何であるか。アウグスチヌスは神国論第五巻において、此の問題に就いて論ずるのであります。

さて、アウグスチヌスは宗教家として、ローマを現実的に偉大ならしめた第一原因として神の摂理を挙げます。（併し今は時間がありませんので、此の問題には触れません。）ローマをして偉大ならしめた第二原因として、ローマ人自身が優れた自然的徳を持っていたとアウグスチヌスは考えます。その自然的徳とは「自由に対する愛」とよき意味の「名誉心」であります。「名誉心」には二種類あります。アウグスチヌスはよき意味の名誉心即ち honor と悪しき意味の名誉心即ち gloria とを区別します。此の区別は大雑把に言えば、よき意味の名誉心とは判断の規準を自己自身の内に、即ち自己の良心において持つものであり、悪しき意味の名誉心とは判断の規準を自己以外に、他人において持つものと言えらると思ひます。よき意味の名誉心とは、よき意味の自尊心であり、又廉恥心であります。ローマ人は自由を愛し、名誉を尊びましたので、他人の奴隷となり、他人の下風に立つをいさぎよしとせず、為に刻苦努力して、七つの丘の小さな国から段々と近隣の諸国を服従させて、一步一步大国へと発展したのであります。ローマ人は仲間の間においても尊敬されることを欲しました。その場合ローマ人全体の間にも剛毅、寡欲、清廉潔白の諸徳を尊ぶ気風がみなぎっておりましたので、此等の諸徳を持つものが尊敬されました。従って仲間の間においての尊敬を得る為にも、彼等は低い欲望を犠牲にして、此等の諸徳を得ることに努力したのであります。

アウグスチヌスはローマの道徳的水準の一番高かった時代を、サルステ

ィウスやタキトス等と同じ様に第二ポエニ戦役（218—202）と第三ポエニ戦役（149—146）の間、即ち紀元前第三世紀の終から第二世紀の前半と考えました。事実大敵カルタゴを目の前にしていた為もあって、此の頃のローマの人心は緊張し、道徳性も高かったのであります。ローマの城門に迫った名将ハンニバルを押し返したのもローマの道徳力であったと言われております。当時のローマの元老院の規律は厳しく、少しの賄賂、売官も死刑を以て罰せられました。

併し第三ポエニ戦役以後即ち紀元前第二世紀後半以後ローマは段々道徳的に低下して来ます。殖民地の獲得による富の流入、それから生ずる社会的構造の変化、ローマ国家の中核をなしていた農民階級の没落、少数の富裕階級と増加する貧民、そこから生ずる階級闘争や内乱等によって、質実剛健だったローマは段々奢侈、柔弱へと墮落して行きます。アウグスチヌスは神国論において勿論此等の現象の経過を細かく叙述している訳ではありません。ただ簡単に富の流入増大によってローマ人は段々墮落して来たと書いております。ローマ人は真の徳よりも金銭を欲するようになった、そして社会全体に徳よりも金銭を重んずる風潮が生じて来た、従って有徳清廉な人よりも富裕者が社会において尊ばれることとなった、従って又名譽獲得の手段として、ローマ人は徳に励むよりも金銭獲得に努力するようになった、此の様にしてローマの社会全体と個人とは、相互に作用しつつ、交互に原因となり、結果となって、段々と道徳頹廢へと転落して行った、とアウグスチヌスは書いております。

偉大なローマは何故衰え亡んだか、に就いてのローマ衰亡論は昔から現在に至る迄数多く出ています。皆夫々各方面から論じていますが、アウグスチヌスは道徳的頹廢の側面からローマの衰亡を見えています。

少し脇道へ入りますが、大体ギリシヤ、ローマにおいては歴史の厭世的見方が強いです。ヘロドトスは次の様に言っています。「自分は大きな都市に就いても小さな都市に就いても語ろうと思う。と言うのは、昔強大であったもので弱小になったものも多いし、今強大でも昔は小さかったもの

もある。人間の幸福は変転するものだとすることを自分は知っている。⁽⁷⁾」

ポリビオスは次の様に言いました。「身体におけると同様に、政治体制、政治勢力にも成長、隆盛、衰亡の自然的段階がある。⁽⁸⁾」アウグスチヌスも「此の世のものは如何なるものも永遠ではあり得ない、従って民族も国家も例外ではあり得ない」と考える点ではギリシヤ、ローマの歴史家と同じです。否私は此の世のものだけに就いて見ている限り、近世のヴィコーでもヘーゲルでも同じ考えだと思えます。ヴィコーは次の様に言いました。「民族は最初は粗野であり、次に強健、次に温和、次に繊細優美、最後に不道徳になり、そして滅びる。⁽⁹⁾」次にヘーゲルは「世界歴史は世界審判である⁽¹⁰⁾」と言う有名な言葉を吐きました。これは各々の民族、各々の国家は夫々世界史における自分の役割を果すと歴史の舞台から退場すると言う意味です。即ちヴィコーでもヘーゲルでも、夫々の一つの民族、一つの国家に就いて言うならば、必然的に没落せざるを得ない、と考えている訳です。ただアウグスチヌスと違う点は、近世においては、進歩と言う考えが基調にありますので、一つの国家が減んでも、次の国家がその成果を引きついで、更にそれを発展させると言う楽天的な考え方をすることです。始めに引用しましたヘーゲルの「歴史は自由の意識における進歩」とは、世界理性が、各民族、各個人の興隆と没落の経過を通して、自己を実現することです。併しアウグスチヌスは此の重要な点において近世の考え方と異っています。アウグスチヌスには、現実の歴史に関しての進歩の考えはありません。アウグスチヌスは、当時の一般の人々の考え方と同じ様に、アダムから世の終りに至る迄の時を六つの時代に分け、キリスト御降誕以後此の世の終り迄は第六番目の時代であり、アウグスチヌス自身は此の第六番目の時代に住んでいる、と考えていたのであります。又当時一般のキリスト教歴史家達の考え方であった四大帝国説をとっております。これは旧約聖書のダニエル予言書に基づくもので、四つの大帝国が興隆衰亡し、それで此の世は終ると考えるのであります。そしてその最後の大帝国はローマであると考えていました。ローマの滅亡を以て此の世は終ると

考えていたのであります。

さて、少し脇道に入りましたが、又本筋に戻ってアウグスチヌスのローマ衰亡論に就いて述べたいと思います。ローマの衰亡は、その第一原因の側面に就いて言えば、勿論神の摂理による必然性ですが、第二原因の側面即ち人間の自由意志的行為の側面に就いて言えば、人間が現実世界をただ現実世界と考え、その根柢にある、永遠者、神を考えなかったからである、とアウグスチヌスは考えます。そしてこれは、原罪を負う人間には免かれることの出来ない宿命である、従って又此の世の国家はいずれも滅びるものである、とアウグスチヌスは考えるのであります。現実世界におけるすべてのものは、その根柢にある永遠者から切り離された時は衰え亡びねばなりません。それは丁度草木が根から切り離された時枯れねばならぬのと同様であります。現実世界におけるすべてのものは相対的に過ぎません。現実世界だけに規準をとった勇氣、正義等の諸々の徳もそうでありませぬ。徳が眞の徳であり、絶対的であり得る為には絶対者との関係に結びつけられねばなりません。即ち信仰に基づいたものでなければなりません。「信仰に基づかない徳は輝ける悪徳」に過ぎませんので、それは必然的に悪徳へと転化せざるを得ないものなのであります。

此の経過はローマの道徳的墮落に就いても見られます。ローマを偉大ならしめた原因は、前にも述べました様に、ローマ人の持っていた自然的徳、殊に「自由を愛する心」と「よき意味の名誉心」であります。併しこれらの徳等も人間の根柢にある永遠者に関係づけられず、人間自身の中に基礎づけられる時には「自己愛」であり、「傲慢」であります。従ってこれは必然的に墮落せざるを得ません。アウグスチヌスにおいては人間の中心をなすものは意志又は欲求ですが、アウグスチヌスは意志、欲求の墮落を次の様に見ました。第一段階は自由を求め「よき意味の名誉を欲求する心」であります。これをアウグスチヌスは「honor を求める心」と呼びます。此処では判断の規準は自己にあり、他人の批評を顧慮することなく、ただ自由を愛し求めます。「自由を持つことが名誉をもつことであり」

逆に奴隷は不名誉であります。第二段階は「人間的榮譽の欲求」(cupiditas humanae gloriae) であります。此処では他人からの称讃を求めます。そして反面、正当な判断を下し得る人の批判を恐れます。偽善にせよ、善を求めます。第三段階は「他人の批評を恐れることなく、ただひたすら自分の欲望に従う支配欲」です、アウグスチヌスはこれを cupiditas dominationis と呼びました。此の欲求の窮極する所、遂にはネロの様な人物さえ生み出しました。ネロは自分の欲望の為に大勢の人を殺しました。遂には自分の妻や母さえも殺しました。タキトスの「年代記」を読みますと「人間とは何と言う存在なのだろう」と考えて誰でも絶望的になると思います。

以上述べたことから分ります様に、現実世界に住む人間、及びその人間の集団たる社会は、その基盤である永遠者を忘れる時、必然的に墮落衰亡するものであります。勿論アウグスチヌスは、此の現実世界そのものを「地の国」と言っている訳ではありません。神国論第十四巻には「神の国」と「地の国」に就いての有名な定義がありますが、此の現実世界には「神の国」に属する人々と「地の国」に属する人々が混在しています。併し其処で支配的なのは「自己愛」である、とアウグスチヌスは考えます。自己愛は更に増大して他人に優越しようと言う欲望となり、更に進んで他人を支配しようと言う支配欲となります。人は又エゴイズム故に他人と結合して集団をつくり、集団的エゴイズム、集団的支配欲を發揮します。アウグスチヌスは、家族は原始的なものであり、神聖なものと考えます。又此の家族の集りから出来た部族国家も、その成員はお互に友情を以て結びつけられた好ましきものと考えます。併しやがて支配欲が生じて、隣国を侵略して大帝国をつくるようになります。それは悪であります。前にも述べました「国家盗賊団説」は此の点を指しているのであります。此の大国家は又、お互に他を支配しようとして武力を以て争います。アウグスチヌスは戦争も、その根本の原因は支配欲にあると考えます。アウグスチヌスは神国論第三巻において、過去のローマの物理的不幸、物質的不幸を叙述

していますが、アウグスチヌスを訪れたポルトガルの司祭オロシウスは、アウグスチヌスの勧めに従って、同じ仕方で世界史を書きました。彼は、此の世は原罪を負うた人間が支配欲に駆り立てられて闘争する「涙の谷」であると言う見方で世界史を書きました。私は此の現実世界に就いてアウグスチヌスも、根本において、オロシウスと同じ見方をしていると思います。

それではアウグスチヌスは此の現実世界に対してどの様な意味、価値を認めていたのでしょうか、其処からただ逃避すればよいと考えていたのでしょうか。そうではありません。アウグスチヌスは「此の世界も亦そのよきものを持つ」と言っております。それは相対的価値を持っております。更に此の世界は、身体を持った我々人間が其処に置かれ、其処で行為し、自己の価値を決定する場所であります。人間は此の世界において隣人愛を實踐し、正義その他の諸々の徳を實行せねばなりません。それによって人間の死後の運命はきまるのだとアウグスチヌスは考えます。即ちアウグスチヌスによれば、此の世界はそれ自身が価値を持っていると言うよりも人間の教育の場所、訓練の場所であります。

それですからアウグスチヌスの見方によれば、此の現実世界そのものよりも、其処において行なわれる人間の行為の方が大きな価値を持つものであります。勿論人間の行為は、此の世界をよくし、其処に愛と正義が実現されることを目指して行なわれるものです。その意味において此の現実世界は行為の目的と言うことが出来ましょう。併し現実的世界と言いましても其処において真に価値をもつのは一人一人の個人、人格であります。そして個人、人格の本質は永遠的であり、その根拠は永遠的世界にあるのであって、此の現実世界にあるのではありません。此の現実世界は人格の行為する場所としてのみ価値をもつものです。

又他の観点から言えば、次のことも言うことが出来ると思います。人間は自分のなした行為が此の現実世界においてどの様な結果を生み出すかを正確には知ることは出来ません。まして多くの人間の行為の総合の結果で

ある歴史の方向を知ることは出来ません。勿論色々な事実から憶測して、ヘルダーの様に「歴史はヒューマニティーの進歩である⁽¹¹⁾」とかヘーゲルの様に「歴史は自由の意識における進歩である」とか言うことは出来ましょう。併しこれも単に憶測であり、ある意味において、信仰（確信）であります。人間の理性は限られたものであり、歴史全体を見透すことは出来ません。人間が歴史全体に就いて語っている時それは信仰の立場（勿論信仰には色々な意味がありますが）から語っているのであります。

以上述べたことから明らかな様にアウグスチヌスによれば人間の国籍は天国にあり、人間は此の地上を旅する旅人であります。此の現実世界は彼が其処においてよき行為を行ない真のよき意味における永遠性を獲得する為の行為の場所であります。所謂現実世界は第二義的な重要性しか持ちません。併し人間が其処で行なう行為は第一義的重要性を持ちます。此の様な構造はアウグスチヌスの「告白録」第十一巻に述べられている有名な時間論にも表われていると思います。その時間論を少し補足して言えば次の様だと思えます。我々が日常的立場において時間の三つの要素と考える過去、現在、未来は、それらの根柢にあって、それを包む「永遠の現在」の上において成立っています。時間は人間の精神に対応したもの、人間の精神能力のつくり出すもの、「魂の拡がり (extensio animae)」であります。即ち人間の精神能力から言えば、過去は「記憶」と言う精神能力によって、未来は「期待」と言う精神能力によって、現在は「注視」〔あるいは論視 (intuitus)〕と言う精神能力によって成り立つものです。我々が身体をもつ所の、此の現実的世界における行為的存在者である限り、過去、現在、未来と言う時間の三要素は我々にとって必然的であります。併し人間の使命は、此の現実的世界における行為によって、此の現実的世界の根柢をなす永遠的世界に入ることです。分り易い様に比喩的に言えば、次の様に言えるかと思えます。我々は普通、時間を過去より現在を通過して未来へと流れる一つの直線として表象します。併し此の様な直線は、これを包む高次存在者の上において成り立っているものです。比喩的に

言いますと、真実在は球で、此の現実的世界はその一つの横断面です。此の現実的世界における時間は、此の平面上を走る一つの直径の線の様なものです。此の意味において歴史の時間は水平的に走ると言えましょう。併し人間は此の現実世界における行為によって、此の水平面とは直角の方向に、即ち垂直の方向に永遠者へと高まる事が出来るのであります。

以上述べたことから明らかな様に、アウグスチヌスは此の現実的世界をただそのものとして見ているのではなく、その根柢にある永遠的世界と共に見ております。従って歴史を論ずる時も、我々の普通、歴史的世界と呼ぶものを挿んで、その前の歴史とそれ以後の歴史即ち所謂終末論を共に論じている訳であります。

以上述べて来ましたアウグスチヌスの歴史観は、思想史的に見ますと、アウグスチヌスの百年位前に出たエウセビオスの歴史観と丁度対照的であります。エウセビオスの「教会史」はキリスト教の歴史思想を纏めて述べた大きなものとしては最初のものであります。エウセビオスは第三世紀末の激しいキリスト教迫害を見聞し、体験しました。又其の後のコンスタンティヌス大帝のキリスト教寛容令を非常な喜びを以て迎えた人でありませぬ。彼の歴史観は此の様な体験より生じたものであります。エウセビオスは、キリスト教は遂にローマに打ち克つたと考えました。流石のローマもキリスト教を迫害を以て屈服出来ず、これを許さざるを得なくなった、今後キリスト教はローマの協力を得て、全世界に広まるであろう、と言いました。彼はコンスタンティヌス伝を書き、コンスタンティヌスがキリスト教の信仰を得、キリストの加護によってローマを再統一したことを讚美しました。エウセビオスはキリスト教を現実世界において利益^{りやく}をもたらすものと考え、キリスト教と現実世界を、更にキリストとローマ帝国とを結びつけたのであります。

アウグスチヌスはエウセビオスの此の考えに反対します。アウグスチヌスはキリスト教は「此の世」を対象にするものでなく、永遠を対象にするものであることを主張します。キリスト教を信じた君主の下において政治

が必ずしもうまく行なわれた訳でもなく、又反対にキリスト教を信じなかった君主の下で政治が失敗した訳でもない、と云いました。又キリスト教を信じた君主が現世的に見て必ずしも幸福であった訳でもなく、又反対にキリスト教を信じなかった君主が現世的に見て必ずしも不幸であった訳でもない、と種々の例を挙げて説きました。要するに、キリスト教を信ずるか否かは、現世的に幸福であるか不幸であるかに別に関係はない、と言うのであります。アウグスチヌスはキリスト教を「終末論的なもの」と考え、キリスト教と此の現実的世界との結びつきを、更にキリスト教とローマ帝国との結びつきを断ち切ったのであります。

更にアウグスチヌスは次の様な意味深い言葉も述べています。此の世の所謂「幸福」がどんな詰らないものかを示す為に、神はそれを善い人間にも悪い人間にも与え給うのである、と言うのであります。⁽¹²⁾

少し脇道に入りますが、私はアウグスチヌスの此の言葉を読んだ時、カントが「実践理性批判」の終りの個所で言っていることを思い出しました。其処でカントは次の様に言っています。善き人は幸福でなければならず、悪しき人は不幸でなければならない。これはすべての人の心に潜む自然的欲求である。併し実際の世の中を見ると必ずしもそうっていない。故に善き人がその当然の報酬たる「幸福」を享け、悪しき人がその当然の報酬たる「不幸」を受ける為には、来世がなければならない……此の様な議論をして、カントはこれを不死、霊魂不滅の論拠にしています。此の「実践理性批判」の終りの部分はカントの倫理説の中でも甚だ弱い部分として屢々指摘されるのですが、併しそれにしても所謂「幸福」に就いてカントはアウグスチヌス等に比較すると非常に素朴な考え方をしているのではないかと思います。

以上を以てアウグスチヌスの神国論の叙述は終わりと致します。あと一言、此の演題に書きました「神国論の現代に対する意義」に就いてもう少し付け加えたいと思います。私の既に述べた所からお察しがつくと思いま

すが、私は現代においても歴史哲学は、終末論をも背景に含めて考えねばならぬと思います。人間の生を考える時、人間の死亡をも含めて、言い換えれば死を背景に置いて考えねばならぬように、歴史哲学は終末論を背景に置いて考えねばならぬと思います。此の現実世界をただ此の現実世界として考察する時どのような矛盾が出て来るかと言うことは、始めにヘーゲルの歴史哲学において述べました。現代では未来に就いての議論が相当なされているようであります。併しその未来論においては、未来がただ今の現実世界の時間を延長して行ったその先の方に考えられている様に思われまゝ。併し人生を終って白骨となって墓の下に眠る個人個人に対して、その未来なるものが何の意味があるのでしょうか。私はこれを疑問に思うのです。認識は、認識主体と認識客体の関係において成立するものですが、認識主体のない認識客体とは如何なるものでしょうか。勿論私は此の身体的死によって——アウグスチヌスの言葉を使えば「第一の死」によって——自分が消失して了うとは考えておりません。私は永遠を信ずるものです。併し死によって現実世界との断絶があると思います。勿論断絶と共に連続の面もあるでしょうが、併し断絶の面もあると思います。前にも述べた様な素朴な未来論を説く人々は此の点をどう考えているのでしょうか。キエルケゴールは彼の「哲学断片後書」において次の様に書いております。「私が世界歴史にとりかかる前に死に就いて考える方がよいと思う。私が余り博学になってその結果、私及びすべての人にいつか必ず遭遇すること(13)に就いて考えることを忘れるならば存在は私を嘲けるであろう。」「一個の実存者であることは世界歴史的にはつまらぬこと、極くつまらぬこと、であるかも知れない。併しそれは人間の唯一の、真の、実際に最高の意義である。」(14)

私はキエルケゴールの此の言葉に賛成します。但しキエルケゴールは此の様に言って世界歴史的考察は行なわなかったのですが、此の点に就いては私は反対します。人間は歴史的考察もしなければなりません。併し其の際自分が「死すべき存在である」ことを忘れてはなりません。その様な自

覚を以て歴史的考察をすれば、その歴史的考察は終末論をも含んだものとなると思います。此の様な点に就いて、即ち歴史は終末論を背景に置いて考察されねばならないと言う点に就いて、アウグスチヌスの神国論は、現代に対しても教える所多いと思います。

(此の論文は、昨年第二十回中世哲学会大会において行なった公開講演の原稿に若干加筆し、註を付したものである。)

註

- (1) Hegel: Die Vernunft in der Geschichte. (phil. Bibl.) p. 40
- (2) ibidem. p. 40
- (3) ibidem. p. 51
- (4) Augustinus: De civitate Dei. XV, 4.
- (5) Aug.: De civitate Dei. IV, 4.
- (6) Aug.: De civitate Dei. XIX, 25.
- (7) Herodotos: Historia. I, 5.
- (8) Polybios: Historia. VI, 51.
- (9) The New Science of Giambattista Vico. (transl. by T. H. Bergin. 1968, N. Y.), Book I, p. 242
- (10) Hegel: Enzyklopädie § 548.
- (11) Herder: Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit. III, 15.
- (12) Augustinus: De civitate Dei. I, 8.
- (13) Kierkegaard: Gesammelte Werke. Band 6. (übersetzt von Chr. Schrempf. 1925) p. 228
- (14) ibidem. p. 215